

弓張月

川村龍俊

人に轢死あり

轢死＝歴史（れきし）

ふふ

ふ＋きゅ＋う 復旧（ふっきゅう）

ならば街に歴史あり  
（ただし今日まで）

きゅきゅ

故に生霊死、帝都死

生霊死、帝都死＝政令指定都市（せいれいしていとし）

以上三点

（いちいちメモるな

三点／いちいち＝3・11（さんてんいちいち）

うう

春だけど寒いから  
男色系の恋色の服、縞模様も期待  
でも年の差意外

男色系の恋色＝暖色系の濃い色 ただの言葉遊び（笑）  
服、縞＝福島（ふくしま）  
年の差意外＝都市の災害（としのさいがい）

ふふ

電話なら、無いかな  
（電話なら、無かったよ

でんわならないかな（その1）  
でんわならなかったよ（その1）

電話ならな、買ったよ

でんわならなかったよ（その2）

電話、鳴らないかな  
（電話、鳴らなかつたよ

でんわならないかな（その2）  
でんわならなかったよ（その3）

電話鳴らな、行かな

でんわならないかな（その3）

ふふ

ぼくの前に未知はない  
今日は荼毘、愛でたいな

ぼくの前に道はない（高村光太郎） 本当の空  
今日はダービーめでたいな（走れコータロー）

そんなにいじことだったら夢である訳ないじゃない

コータロー繋がり

ふふ

うるさい  
まだ泣いてないんだ

「司張月」自注

この詩は、『詩と思想』平成二十二年七月号掲載用として、同年二月八日に同誌編集委員会より、四月二十日締切で依頼されたものです。何を書くかまったく決めていない間に、三月十一日の大地震がおこりました。勤務先の福島県須賀川市で被災した私は、それから東京と福島を往復しながら会社の復旧の指揮を執り、気がついたときには締切日になっていました。

同誌編集部に電話したところ、少しなら待てることでしたので、結局四月二十二日に書き上げ、メールおよび郵便にて原稿を送りました。

結局、震災被災者として、震災後四十日目の実感を読み物にする、という以外、書くことができませんでした。かといつて、詩の言葉で何を表現できるか、ろくに詩を書いてきたことのない自分には見当もつきませんでした。

日常と非日常の差を、音読したときと黙読したときでは全然違うことになるということでは表せないか。そして全体としては（少なくとも被災者ならば気分や感情が共有されているだろうことを前提にはいても）何か散文ではない仕方では震災と震災以降の体験を読者に少しでも追体験してもらえないか、というところが仕上げていく中での支えでした。

震災の報道でよく耳にする言葉を言い換える。「政令指定都市」の言い換えができたとき、その言葉遊びは、数点のバリエーションを生みました。

電話は携帯電話のことです。東京に居る家内は携帯を持っていないので、震災以後買うかどうか迷っていることから発想しました。地震当日、十四時間かけて福島から東京へ一人で運転して帰るその道々、いったい何回携帯を取り出しては着信を確かめたことでしょうか。そして、何回、かかるまでかけ続けたことでしょうか。「電話鳴らな、行かな」は、震災後、電話が繋がらなかったとき、それなら自分で東京へ向かおうと決めた、その気持ちそのままです。

福島といえば、智恵子の台詞として光太郎が詩に書いた「本当の空」が観光の目玉ですが、震災以後、放射能による実害と風評被害によってその安達太良山には登れないままです。しかし県民にとつて、原発にもしもがあつたらという問いかけは決して未知のものではなかったはず。津波によって壊滅した海岸では遺体が茶毘に付され、まだ見つからない家族を捜しあぐねて避難所へ戻る毎日が続ける人々が大勢います。そして津波で傷ついた遺体はまさに斃死体。

過酷に非日常と日常が入れ替わりましたから、見る夢と言えば「元に戻りたい」しかないのです。でも、震災以前に見ていた夢は、もう一度と見られないのです。新しく何かを創ることは、まだやりたくないし。泣くに泣けない。泣いても何も変わらないし始まらない。

報道、風評、インターネット、そしてAC（笑）。助けて欲しいけど、ほっといても欲しい。過剰な情報の中では、基準を見つけれないでいます。自分のそれまでの歴史以外には。